

|                  |                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 「新しい伝統」の継承と更新：SFCフランス語研究室の実践と取り組み                                                                                                                                                                                                                    |
| Sub Title        | Heritage and updates : practices and initiatives at Keio SFC French Section                                                                                                                                                                          |
| Author           | 西川, 葉澄(Nishikawa, Hasumi)                                                                                                                                                                                                                            |
| Publisher        | 慶應SFC学会                                                                                                                                                                                                                                              |
| Publication year | 2025                                                                                                                                                                                                                                                 |
| Jtitle           | Keio SFC journal Vol.24, No.2 (2024. ) ,p.54- 63                                                                                                                                                                                                     |
| JaLC DOI         | 10.14991/003.00240002-0054                                                                                                                                                                                                                           |
| Abstract         | 慶應義塾SFCのフランス語セクションでは、SFCの先進的な言語教育の伝統を受け継ぎ、フランス語とフランス語圏の多様性に対応することを教育目標としてフランス語科目の授業運営を行っている。本論では、現在のフランス語科目がSFCの伝統にどのように立脚したものであり、どのような要素が継承され、どのような新しい更新がなされたかを紹介する。また、新しい試みについては、その意図や狙いを示しながら実践報告を行い、複言語・複文化主義的価値観の尊重という観点から、今後の言語教育のあり方について考察する。 |
| Notes            | 特集 地域研究リテラシー：SFCにおける現在と展望<br>第1部<br>招待：実践報告                                                                                                                                                                                                          |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                                                      |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11671240-00240002-0054">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11671240-00240002-0054</a>                                    |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[招待：実践報告]

## 「新しい伝統」の継承と更新

### SFC フランス語研究室の実践と取り組み

#### Heritage and Updates

#### Practices and Initiatives at Keio SFC French Section

西川 葉澄

慶應義塾大学総合政策学部専任講師

Hasumi Nishikawa

Assistant Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Correspondence to: nhasumi@sfc.keio.ac.jp

#### Abstract:

慶應義塾 SFC のフランス語セクションでは、SFC の先進的な言語教育の伝統を受け継ぎ、フランス語とフランス語圏の多様性に対応することを教育目標としてフランス語科目の授業運営を行っている。本論では、現在のフランス語科目が SFC の伝統にどのように立脚したものであり、どのような要素が継承され、どのような新しい更新がなされたかを紹介する。また、新しい試みについては、その意図や狙いを示しながら実践報告を行い、複言語・複文化主義的価値観の尊重という観点から、今後の言語教育のあり方について考察する。

**The French Section at Keio SFC designs and offers courses in French as a foreign language, based on SFC's philosophy of advancing language education. The core educational goal of the French Section is to recognize the richness in the diverse variants of French Language that are spoken around the world. This paper will provide an overview of how the current French courses endorse SFC's vision for language education while recognizing changes in the ways societies evolve. New attempts and practices will also be reported as individual cases. The presentation concludes with a few words on the future of foreign language learning and the importance of incorporating plurilingualism and pluriculturalism.**

#### Keywords:

SFC フランス語研究室、フランス語教育、多言語主義、複言語主義、フランス語圏、多様性  
the French Section at Keio SFC, FLE, multilingualism, plurilingualism, francophonie, diversity

#### はじめに

社会の急速な進展に伴い、言語の使い方も様々に変化している。フランス語も同様であり、フランスでの 2016 年度新学期カリキュラムからの「新しいつづり字 (la nouvelle orthographe)」のフランス教育省による正式採用、グローバル化に伴う英語をはじめとする様々な外来語の受容、地域言語や方言の尊重、ジェンダーニュートラルな言語の使用 (l'écriture inclusive)、SNS に代表される新しいコミュニケーションの形態の普及による影響等のさまざまな例が次々と想起されるだろう。また、フランス語が話される国や地域はフランスに限らずヨーロッパ、北米、アフリカその他の地域に広がるが、特にアフリカのフランス語圏の経済的発展に伴うフランス語話者の増加は注目を集めている。またフランスを例にしても、移民政策により様々な出自をルーツに持つ国民の割合が増加し、言語のみならず文化的多様性も広がっている。こうした状況において、日本におけるフランス語教育のあり方も再検討を求められている。

慶應義塾 SFC のフランス語セクションでは、キャンパス開設以来の伝統となっている SFC の先進的な言語教育ヴィジョンを継承し、フランス語とフランス語圏の多様性に対応することを教育目標としてフランス語科目の授業運営を行っている。本論では、現在のフランス語科目が SFC の言語教育の「伝統」にどのように立脚し、何が継承され、どのような新しい更新が追加されたかを紹介する。また、新しい試みについては実践報告をする中で、その意図や狙いを示していく。最後に複言語・複文化主義的価値観の尊重という観点から、今後の言語教育のあり方について考察する。

#### 1. SFC フランス語研究室が運営する授業の意図とねらい

##### 1.1 新しい伝統：SFC の先進的言語教育

1990 年の開設より、湘南藤沢キャンパス (本論では以降 SFC と省略する) では人工言語と共に自然言語 (外国語) の教育に力が入れられてきた。SFC は文理融合型の学際研究を標榜して開設されたキャンパスであるが、外国語学部や文学部を擁さないキャンパスが、開設以来の理念の一つである多言語主義のもとに、英語だけでなく、ドイツ語、フランス語、マレー・インドネシア語、中国語、朝鮮語の 6 言語のインテンシブコースを設置し、実践的外国語運用能力の習得を目的として、言語を集中的に学ぶことのできるカリキュラムを提供したことは日本の外国語教育において事件であったに違いない。しかもそれは、よく耳にする English plus one といった「前提として英語が必修で、さらにもう一つ第二外国語を選択して履修する」という形ではなく、「第一外国語」「第二外国語」という概念と区別を

廃し、英語も含めた6つの言語をインテンシブコースで学べる、というフラットな形式の選択肢として学生に提示されるという画期的なものであった。

このインテンシブコース(以下「インテンシブ」と省略する)では、教授法にコミュニケーション・アプローチが採用され、チームティーチングをベースとして、学習時間を「100分授業が週4回で1セット」として設計されたが、日本の多くの大学において外国語科目の一般的なプログラムである「90分授業が週2回で1セット」という形式と比較しても、これがいかに一般的な日本の大学の外国語教育へのアンチテーゼであり、改革的な理念のもとに作られたかということは一目瞭然である。2005年に『外国語教育のリ・デザイン』(以下『リ・デザイン』と省略する)において、SFCの英語以外の外国語教育について、その理念と実践の変遷、および先端的研究までがまとめられているが、古石が総括するようにどの語種も「日本の中でも常に先端を走ってきたと自負できる」(古石, 2005, p.30)ということに関しては疑いの余地がない。

SFCの外国語教育のカリキュラムは、キャンパス開設時から、必修科目や必修単位数等の変更をめぐり数々の変遷を経て今に至る。2000年代前半までの変遷の詳細は古石(2005)に詳しいが、『リ・デザイン』でなされた総括から約20年が経過した現在も、言語教育の柱として「インテンシブ」が中心づけられる構成は変わらない。現在11言語の選択肢を持つSFCの言語コミュニケーション科目においては藁谷(2023)がまとめるように、「インテンシブ」は開設当初の6言語に加え、スペイン語、アラビア語、ロシア語、学習言語としての日本語の10語種で実施されている。なお現在ではインテンシブの授業時間は100分から90分に変更され、週4回授業日があるという設計も、1週間に4セットの授業(連続して2時限の授業も可能)と変更されている。

現在慶應義塾大学では法学部、理工学部においても外国語科目のインテンシブコースが開講され、すでに珍しいものではなくなったが、SFCの外国語教育においてはキャンパス開設以来「インテンシブ」の背後にあるさまざまな理念が、現在に至るまで学生たちの言語学習を支えてきたのであり、これが現在も「SFCの伝統」として継承されている。

## 1.2 SFC フランス語教育における「伝統」の継承

キャンパス開設時よりインテンシブコースを開講した「フランス語」は、SFCの外国語教育の発展を牽引してきたセクションの一つであるが、また同時に先進的な実践と研究により日本のフランス語教育をもリードしてきた。フ

ランス語研究室の歴史の中で積み上げられたさまざまな試みや研究成果が、今日のフランス語プログラムの基盤となっている。時代の移り変わりや、社会や学生のニーズの変化、専任教員の交代等によって変遷を経たものもある一方で、「SFCの伝統」の基本的精神の根幹はその多くが継承され現在に至っている。ここではフランス語カリキュラムの詳細な変遷を歴史的に振り返ることは割愛するが、現在実施されているフランス語の教育実践における「SFCの伝統」がどのように継承されているかを示したい。

### ① カリキュラムデザイン

まず、カリキュラムデザインにおいて「インテンシブ→スキル→コンテンツ」という、初級から上級に至る学習ルートが土台となっていることは変わらない。これはかつて古石(2005, p.43)が「外国語「エリート」養成の中心」としてその使命を端的に示したが、学生が「インテンシブI」から「インテンシブIV」へ積み上げることで入門から中級レベルに至る基礎を固め、その後はテーマ別の「スキル」で言語運用能力を強化し、さらに「コンテンツ」ではフランス語学習ではなく、専門的内容をフランス語で学習するというレベルに至る壮大なプログラムである。学生が大学入学後に初習言語の学習を始めたとしても、3～4年程度の時間をかけて上級レベルまでの授業を履修して研鑽を積みめば、かなりの実力を蓄えることのできる充実したプログラムと言える。

現在の「インテンシブ」のレベル設定は「インテンシブI」が入門から「ヨーロッパ共通言語参照枠」のA1、「インテンシブII」でA1からA2、「インテンシブIII」ではA2からB1、「インテンシブIV」ではB1の達成を目標としている。春学期、秋学期のどの学期に学習を開始してもシームレスに次のレベルの科目履修が可能な構成となっている。「スキル」では文献講読、口語翻訳、文法、フランス語能力試験であるTCF対策、アカデミックライティング等7個のテーマ別の授業が毎学期用意され、演習科目なので繰り返し履修が可能である。インテンシブIV終了後の学生が言語運用能力の維持向上をし、さらなるレベルアップを目指すニーズに応えるものである。近年の新しい試みとしては、学生の自主性とプロジェクト遂行能力の育成も狙う英語科目の「プロジェクト英語」から着想を得て、フランス語によるプロジェクトの立案・実行をテーマとするスキル科目も加わった。「インテンシブ」以外にも、授業が週2回のベーシックコースも選択可能である。「ベーシックI」「ベーシックII」はA1レベルの内容に親しみ、基礎的な理解に役立つレベル設定であるが、さらに学習を続ける場合は「インテンシブII」に進むことができる。

## ② フランス語教育の目的と授業運営のスタイル

SFC 開設当時より、SFC のフランス語教育の目的は実践的な言語能力の育成であり、中途半端な教養教育か、将来の海外旅行準備程度の実用性において言語習得を目指すかといった二択的な論争とは無縁の、「本格的にフランス語を使える」学生を育てることを主眼としている。「インテンシブ」に限らず、「ベーシック」においても、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能の訓練に加え、言語面だけでなくフランスやフランス語圏の文化学習と異文化の発見による自文化の相対的理解も重視している。大学で言語を学ぶという経験、つまり新しい言語の学習機会が言語学習に終始するのではなく、その言語が使われる地域の社会的・文化的理解と共に行われ、学生の視野を複眼的に広げ、ひいては自己や自文化を客観的に見る視点を獲得する機会となるようなものとした。そのためには授業を担当する教員が果たす役割が非常に重要であるのは開設時より変わらない。SFC フランス語セクションは数の多いフランス語授業数に比して、専任教員3名と訪問講師(招聘)1名という少人数構成であり、授業運営に関しては非常勤講師の方々の協力を頼るところが大きい。また、上級レベルの「スキル」と「コンテンツ」以外は、チームティーチングがクラス運営のベースとなる。週2回の「ベーシック」では2名の教員、週4回の「インテンシブ」は基本的に4名の教員が、1つのクラスをチームとして担当し、学生の学習サポートにあたる。原則として、各チームは「ベーシック」ではフランス語母語話者1名と日本語母語話者1名、「インテンシブ」ではフランス語母語話者2名と日本語母語話者2名で構成され、それぞれの適性を活かした役割を分担する。役割分担の重要さと関連して、使用する教科書、教材も重要な要素だが、「インテンシブ」の全てのクラスにおいては、数年前から共通教科書の使用を廃止した。これについては次の1.3においてその経緯を記す。

## ③ フランス語コミュニティの重視

フランス語セクションにおけるもう一つの「SFCの伝統」は、キャンパス内のフランス語コミュニティの重視である。キャンパスのλ館の各語種の共同研究室ではそれぞれの活動が展開されているが、λ館3階のフランス語共同研究室もまたSFCのフランス語教育の歴史の中で非常に重要な役割を担ってきた。共同研究室は長年「フラ研」という愛称で親しまれており、専任、非常勤に関係なく全てのフランス語教員と、TA (teaching assistant) やSA (student assistant) と呼ばれる学生アシスタント、そしてフランス語を履修する学生が集まる場として、フランス語学習コミュニティの中核となってきた。TAとSAは、創立者福

澤諭吉の「一日先に学んだものが師である」という慶應義塾の理念に基づき、教員と学生が一体となって学習を指導するための制度である。TAは大学院生が、SAは学部学生が担当し、それぞれ教員と共に教育活動にあたる。

「フラ研」ではフランス語と日本語を共通言語として、通常は教員の授業準備と教員間の交流、学生アシスタントの仕事場、アシスタントと教員、アシスタント同士の交流の場として役立てられるが、フランス語学習のための図書やDVDなどの資料閲覧、フランス語のボードゲームなどの利用も可能であり、フランス語受講生へも開かれている。

SFCのフランス語コミュニティは、コロナ禍以来、様々なデジタルツールの活用でヴァーチャル空間においても発展するが、デジタルな空間は現実のアナログな空間が充実してこそよりよく機能する。後の2.2実践報告において、新たに更新されたフランス語共同研究室の諸活動についてその詳細を述べる。

## ④ どのような学生に育てるのか

言語教育を通してどのような学生に育てるのかという問いがあるだろう。「主体的な学び」はSFCに共通するテーマであり、「学生の自律性」の尊重と育成もまたSFCフランス語セクションに継承される伝統的価値観である。

夏期および春期休暇中に実施される「フランス語海外研修」は、海外でフランス語学習をすることでSFCの単位を取得できるプログラムであるが、現在は学生が指定された複数の研修先の中から自分の目的に合う教育機関を選択し、日程や研修期間、前後の旅程などを主体的に決定できる。そのため、教員は研修地決定や手続き、現地でのトラブル等に関してサポートはするが、教員による引率が行わず、日本出発から帰国までが、学生にとって一連の主体的な学びの経験になる。研修先での授業時間数によって4単位が取得できる「フランス語海外研修A」と、2単位が取得できる「フランス語海外研修B」がある。研修先にはフランス以外にもベルギーのブリュッセルなどを選択肢に含めた時期も存在したが、コロナ禍の海外渡航禁止を経て、フランスのRouen市街地にあるアリアンス・フランセーズ・ルーアン・ノルマンディー (Alliance Française Rouen-Normandie) を唯一の研修地とする時期がしばらく続いた。その後、徐々に研修先を増やし、2024年夏期においては先述のルーアンの他に、ヴィシーのカヴィラム・アリアンス・フランセーズ、ヴィシー (CAVILAM) とエクサン・プロバンスのアリアンス・フランセーズ・エクス・マルセイユ・プロバンス (Alliance Française Aix-Marseille-Provence) を研修機関とした。宿泊は原則として現地の家庭でのホームステイであり、これまで教室で学習したフラ

ンス語を、リアルなフランス語環境において実際に使い、現地の人々との交流で文化や社会について学ぶ機会となっている。

また、英語開講の授業を履修して卒業できる GIGA プログラムが代表するように、SFC には様々なバックグラウンドを持つ学生が多い。GIGA の学生でなくとも、帰国生やインターナショナルスクール出身、あるいは日本の高校でフランス語学習歴を持つ新入生も珍しくない。こうした様々な出自や経験を持つ学生が、それぞれに相応しいレベルからフランス語学習を開始できるよう、フランス語セクションでは各学期前に実施される資格認定試験と呼ばれるシステムを活用している。コロナ禍以前は新学期前のキャンパスにおいて対面で筆記試験を実施していたが、2020 年より Google form を利用したオンライン受験に移行した。オンライン受験の利点は様々あるが、学生側にとっては設定された約 1 週間の受験期間に都合の良い日時での受験が可能となり、新学期前にわざわざキャンパスで受験する必要がないため、気軽に資格認定試験に挑戦できるようになった。また、教員側の利点としては、自動採点により業務負荷が若干軽減されたことに加え、試験形式が個別化されたことから、音声ファイルの提出を求めることで「話す」能力に関しても評価が可能になった点がある。この試験は新入生だけでなく、SFC でフランス語を学ぶ在校生も対象としているため、成功すれば「飛び級」が可能になるこの制度は、学期末の教室やフランス語研究室の HP でも周知され、間接的に長期休暇中の自律的学習の推奨をしている。2023 年には「ベーシック I」しか履修していない学生が、先述の海外研修に参加したことでフランス語の魅力に目覚め、猛勉強をした結果、帰国後の資格認定試験で「インテンシブ IV」に飛び級が認められる等の例も見られた。

#### ⑤ 絶えざる更新

さらに、フランス語セクションの重要な「伝統」として、新しい試みがコンスタントに生み出され、実施されてきたということがある。『リ・デザイン』以降の代表的なものとしては、2014 年からフランス語による海外でのフィールドワークを中心とした研究のための奨学金制度である「フランス語海外フィールドワーク奨励金」の募集が始まり、毎年 1～2 名の学生がフランスやフランス語圏の地域でのフィールドワークに、卒業生や退職された教員の暖かい支援を受けてきた。また、2016 年より総合政策学部・環境情報学部の一般入学試験(一般選抜)において、外国語の試験を多言語化することに伴い、外国語の試験の問題の一部についてドイツ語かフランス語の問題を選択することが可能になった。フランス語を複言語に持つ受験生や、

高校までにフランス語学習歴のある受験生を対象にするものだが、英語以外の言語学習をする高校生を応援し、外国語学習の多様な広がりをもつ奨励するメッセージともなっていると看做されるだろう。より直接的な高大接続の試みとしては、同年 2016 年に東日本高校生フランス語暗唱コンクールの主催が開始された。これは、SFC フランス語セクション、アンスティチュ・フランセ横浜、日本フランス語教育学会の三者による共同開催であり、フランス語セクションは会場の提供をはじめ当日の進行管理、審査員の参加、SFC 賞の授与などで寄与している。このコンクールは毎年 3 月に開催され、フランス語を学習する多くの高校生が参加し、盛況となっている。フランス語の能力に秀でた高校生とフランス語を担当する高校教員に SFC を広報し、優秀な高校生が SFC でフランス語学習を継続するヴィジョンを与えることもその目的である。

以上が現在のフランス語セクションで運営される教育実践の「伝統」である。これらの実践のほとんどが、日本のフランス語教育においてはその独自性により特筆に値するが、改めて現在の実践を振り返る時に、SFC の外国語教育の「新しい伝統」の厚みがフランス語セクションの活動を支えていることがよくわかるだろう。

#### 1.3 「伝統」の更新：フランス語研究室における新しい試み

このように SFC の言語教育の「伝統」の上に立脚しているフランス語教育は、昨今の目まぐるしい社会の変化に対応するため、随時新しく更新されてきた。ここでは主な変更点である、「インテンシブ」における共通教科書の廃止、フランス語の多様性の提示、チーム形成強化と他の言語セクションとの連携について取り上げる。

##### ① 「インテンシブ」における共通教科書の廃止

現在フランス語「インテンシブ I」は、春学期に 3 クラス、秋学期に 2 クラス、「インテンシブ II」は春学期に 1 クラス、秋学期に 3 クラスが開講されている。その上のレベルである「インテンシブ III」は春学期に 2 クラス、秋学期に 1 クラス、「インテンシブ IV」は各学期に 1 クラスが開講されている。同じレベルのクラスが複数ある場合、指定教科書を用いて学習内容と進度を統一し、共通試験による公平な評価をすべきであるという考え方があるだろう。SFC においても 2004 年まではそうした考え方のもとに、指定教科書を用いて、授業日程に教員が扱うべき教材のページ数や項目、出題すべき課題等があらかじめ詳細に決定され、同一の授業内容の保障に重点が置かれていた。この方法により同一レベルの複数のクラスにおける学習内容の統一性が確保され一定の成果を上げた反面、教育のマニュアル化

や教員の自律的な創意工夫が失われることへの批判的反省も出た。この時代の「教授法改革」については古石ら(2005)に詳しいが、こうした経緯によりプログラムが徐々に柔軟なものへと変化し、教員の自律性と自由裁量を尊重するものへと段階を経て変容していった。

その中でも大きな変化は、「インテンシブ I」と「インテンシブ II」において、当時のパトリス・ルロワ訪問講師(招聘)が担当するクラスを、指定教科書を使わずにフランス語を学習するパイロット的なグループとして、共通教科書を使用するクラスとの学習効果の違いに関する比較検討に着手したことである。共通教科書を使わずに、共通教科書を使って教えるクラスとどのように学習内容の帳尻を合わせるのかということに関して、最も重要な役割を演じたのは、チームの中心的存在である訪問講師をはじめ、外国語としてのフランス語教育において経験豊富で極めて優秀な教員の尽力とチームワークであった。彼らは SFC での教育歴も長く、その豊富な経験から、「インテンシブ I」と「インテンシブ II」の各レベルにおいて何が学習されるべきか、ということを知っており、その内容を、教科書で指定される順番ではなく、学生たちの目の前のニーズを拾い、それと擦り合わせた学習内容にすることで、学生たちのモチベーションを学期末まで維持向上させることに成功していた。また、彼らの授業連携は非常に緊密であり、流動的な学習内容の報告と、その報告を受けて即座に反応し自分の役割担当の側面から授業を組み立てることができる職能的体力の高さという要素と組み合わせあって、この成功の背景にあると考えられるだろう。「インテンシブ I」や「インテンシブ II」において「教科書ありクラス」「教科書なしクラス」をそれぞれ受講した学生たちは「インテンシブ III」や「インテンシブ IV」を受講する頃にはほとんど同等のレベルに達し、担当教員による長期的な観察からは、2つのタイプのクラスにおいて学習結果の差はほとんど見られなかったという。この2種類のクラスの共存は2022年まで続き、2023年より「インテンシブ I」と「インテンシブ II」では共通教科書を廃止することで統合された。

共通教科書を全て廃止した背景には、言語学習は学生にとっても教員にとってもより自由であるべきであり、学習は学生のニーズや欲望に基づくべきであるという訪問講師の考え方や「教科書なしクラス」での手法がフランス語セクションの教員間に浸透していったことに加え、長年使用した共通教科書が社会や文化の急速な変化により、時代に合致せず、学生の身の回りの現実や嗜好に合わなくなってきたことにも関係している。共通教科書としてフランスの Hachette 社から出版された FLE の教科書である *Agenda 1* (Baglietto et al., 2011) と *Agenda 2* (Baglietto et al., 2011)

を採用していたが、これらは学習した知識や表現を用いてタスクを遂行できる学習者を育てる、行動中心的(actionnel)な教授法に基づいて2011年に作られた教科書であり、SFCの学生にはふさわしいため長期間の使用に耐えていたが、後継候補の検討は困難を極めた。そのため「インテンシブ I」や「インテンシブ II」において、「教科書なしクラス」のノウハウを担当教員で共有し、学習内容の統一に関してはこれまで使用した教科書と同様の文法項目の学習を目安として、全てのクラスで共通教科書を廃止した。現代社会の急激な変化に伴う言語の新しい現実に対応するためには、教科書は常に「古い」のである。

共通教科書の廃止により、「インテンシブ I」や「インテンシブ II」という初級段階から、教員が各自のクリエイティビティを発揮し、フランス語圏の文化に親しみながら現代のフランス語を発見し学習するという機会を、SFCの学生にさらに提供できるようになった。また、共通教科書がないということは、教材がないということとイコールではない。それぞれの教員が生教材(documents authentiques)等を用い、時には同じチームの教員とも共有し、学生の主体性を促しながら授業を進めている。これは、音声教材に関しても同様である。YouTube や各種のインターネット上の素材から多くの生教材が入手できる現在では、かつてのように教科書付属の音源がフランス語学習の唯一の拠り所であるような学習をさせる必要はないだろう。

この取り組みの成功には、SFCのフランス語教員が非常に経験豊富なベテランであり、長期間にわたってチームで協働してきた仲間同士であるという経緯が大きく関与している。換言すれば、共通教科書の不使用は、教員間の相互的信頼の元に成り立っているとも言える。そしてより良い連携の維持には、授業記録の共有が重要であるが、多くの教員たちが他の教育機関でも授業を担当している現実を考えると、過度の負担がない形で授業記録を残し、お互いにログを閲覧し合う交流が容易にできるようなプラットフォームが必要不可欠となる。これについては2.1においてどのような形で連携が行われているのか実践を報告する。

## ② フランス語の多様性

かつてはフランス語教育といえば、フランスにのみ焦点が当てられ、さらに言うとも首都であるパリが特権的にフランス語学習の最大のアイコンとなっていた。しかし、現代社会においてフランス語やフランス語圏地域の社会や文化について学ぶことは、かつて「フランス人」のステレオタイプとしてしばしば表象されていた「ベレー帽をかぶって、バゲットを小脇に挟む」あるいは「洒落た服装をしながら

パリを闊歩している」といった人物を思い描いて憧れることではないはずだ。フランス語はヨーロッパにおいても、スイス、ベルギー、ルクセンブルグにおいて話され、北米ではカナダのケベック州、アフリカではマダガスカル諸国や西アフリカなど多くの国や地域で使われる言語である。それらの地域で話されるフランス語にはそれぞれ独自の表現や発音上の違いがあるが、パリで話されるフランス語より下に置かれるものではない。「外国語としてのフランス語教育」(français langue étrangère, FLE と略される)において、パリを中心とする地方の発音やアクセントが主に「スタンダードな」フランス語として提示されるのは、例えば東京を中心とする地方の話し方が「標準語」とされることと同じであるが、21世紀のフランス語を学習するのであれば、早い段階でフランス語の複数性に出会うことは重要だろう。こうした観点から、SFCのフランス語教室では、2017年以降、フランス語ネイティブ教員枠に、さまざまなフランスの地域出身の教員に加え、フランス語圏出身の講師を積極的に採用してきた。そのため現在までに在籍した教員には、ベルギー、モロッコ、ケベックの出身者や、フランスで生まれ育ち大学入学を機に来日した日本人講師など、さまざまなアイデンティティを持つ教員がおり、フランス語を共通語とするグループを形成している。なお、モロッコ出身の教員は、2023年度から新たに訪問講師(招聘)としてフランス語共同研究室の運営に参加している。

### ③ デジタル／アナログによるチーム連携の強化と他の言語セクションとの連携

これまで見てきたように、現在のSFCフランス語研究室では、フランス語教育の根幹を成す「インテンシブ」において、チームティーチングによる授業運営、そして共通教科書を使用しない、という2つの独自の条件により、講師間の連携がますます重要な要素となっている。チームティーチングはフランス語セクションにおける「SFCの伝統」であるが、これは一般的に実施されているような、1つのクラスを複数教員が担当するだけの「薄い」チームティーチングとは完全に異なるものである。「薄い」チームティーチングとは、例えば複数の教員(週2回の授業なら2名)間で同じ教科書を用いるが、分担箇所があらかじめ専任教員等によって決められており、学期末にそれぞれの試験結果や出欠状況等のデータを共有し、それらの数値を機械的に処理して成績を決定する、あるいは期末試験等はそれぞれの教員の属性により分担して実施する、という程度なのではないだろうか。一方、SFCのフランス語「インテンシブI」と「インテンシブII」においては、基本的に以下の4つの役割が4名の教員に分担され、それが有

機的に関連付けられる形式となっている。

- フランス(語圏)の社会や文化的知識を通してフランス語を教えるフランス語ネイティブ教員
- フランス(語圏)の社会や文化的知識を通してフランス語を教える日本語ネイティブ教員
- 上記で扱われた項目に出た文法事項を教える日本語ネイティブ教員
- 上記の内容をまとめ、学生に知識の再利用と応用をさせるフランス語ネイティブ教員

上記の4つが基本的に1セットとなり、復習が重視される螺旋状の進行を形作る。このため、毎週の授業で密度の「濃い」チームティーチングが要求されており、前述したように4名の教員が授業で何をしたのかということを具体的にチームメンバーに伝えるためのツールが重要なものとなる。なお、「インテンシブIII」と「インテンシブIV」においては、4名の教員が2つのミニマムペアを作り、それぞれの自由裁量の中で、4技能と文法の学習が行われる。そこでは、フランス語圏の社会や文化について知り、日本の社会・文化との比較や相対化がディスカッション等を通してなされることが求められている。いずれにせよ、どのレベルのチームティーチングにおいても、教員間での緊密な授業報告が期待されている。

SFCフランス語セクションでは、すでに以前からチームの授業記録を共有することが義務付けられており、かつては紙ベースのファイル形式でフランス語共同研究室に保管され運用されていた。それはその後、電子掲示板を利用した「電子連絡帳(cahier de liaison en ligne)」と「スピーチアクト&文法(actes de parole & grammaire)」の形式での運用に変わった(古石ら, 2005)。これはさらに、Webページ上に容易に書き込める仕様となった。そして、コロナ禍によるオンライン授業をきっかけに、授業報告にSlackが導入され現在に至っている。教員の連携強化にデジタルツールを活用する一方、フランス語セクションではアナログな連携も重視している。学期末の成績評価は数値の合算のみで決めるのではなく、チームメンバーが対面形式にせよオンライン会議にせよ集まって、全員でディスカッションをして決定している。また、教員のインフォーマルな会合も、教員間の信頼関係により良い影響を与えることが再確認された。詳細は2.1において後述する。

そして、SFCのフランス語セクションは、他の言語セクションとの協働を通して、複言語・複文化主義的な実践の可能性を模索した。これについては2.3において後述する。

## 2. 実践報告

SFCのフランス語教育は、SFCの言語教育の「伝統」の

上に立脚しつつ、随時アップデートされ、現在に至っている。以下に、フランス語セクションの新たな活動について実践報告をする。

## 2.1 デジタルとアナログによる教員間の連携

「インテンシブ外国語」の理念を引き継ぐ SFC フランス語セクションにおいて最も重要視されているのが、チームティーチングの最適化、つまりどのように良いチームを作るかということである。良いチームティーチングには、教員間の緊密な連携とチームとしての結束が不可欠な条件だ、というのが我々の考えである。そして、共通教科書を設定せず、教材の選択に教員の自由裁量と自律性を尊重することと、チームプレイヤーであることは、一見して相容れない矛盾する二項対立のように見えるかもしれない。しかし、それぞれの教員がチームの一員として自由にクリエイティビティを発揮した授業を展開するためには、まずチームの中で何が学習され、自分はそれを受けてどんな授業に展開したのかを共有することが非常に重要である。この意味において、教員の授業ログを集約し共有するツールは SFC のフランス語の授業に非常に重要である。

1.3 で述べたように、フランス語セクションでは 2020 年の春学期以降、つまりコロナ禍によるオンライン授業開始にあたり、授業ログの記録と教員間の連携に Slack を導入した。全員で共有する Workspace 上にクラスごとのチャンネルを開設して、それぞれの授業ログ等を記入し、チーム内の連絡の場として活用することを促した。

Slack の導入によりフランス語セクション全体が活性化し、それぞれの実践を切磋琢磨する場所ともなった。Slack の導入以前に使用された Web 上の連絡帳システムは、有能な非常勤講師が開発した本格的なものだったが、担当するチームの記録閲覧のみが可能であり、基本的には 1 人が入力したデータが 1 ページずつ表示される仕組みのため、過去に入力された情報の閲覧にはページを 1 つずつ遡るアクションが必要だった。また、この連絡帳システムを使うか、チーム内宛のメールで連絡するかは、各チームの裁量に任されていたため、この連絡帳においては全体俯瞰や全体との連絡が不可能だった。

一方、Slack の利点はその俯瞰性にある。クラスごとのチャンネルで授業連絡がなされるが、新しいメッセージは直ちに全員に共有される仕組みを持つため、担当するクラス以外の連絡もフラットな形で閲覧できるようになった。また、同僚のメッセージに返信する際は、スレッド上に返信することで一連のやり取りが容易に可視化され、さらにメッセージを書く代わりに絵文字リアクションを活用すれば、オンライン上でも意見や感情の表明が容易になり、反

応が増加することで、チームとしての意識も高まった。このように、Slack の活用は授業内容の透明化・可視化と共に、チーム内の仲間意識を高め、さらにはチームを超えた教員間の連携にも役立った。また、メッセージが日付ごとに並べられていくので、過去の実践や課題なども容易に遡って閲覧できる。授業に使用する生教材等を教員間で共有したり、学生の優秀な成果物やうまくいった授業実践等を報告する場としても、大いに役立っている。

コロナ禍による影響は、対面での人間関係が断絶される経験によって、SFC フランス語セクションにもさまざまな教訓をもたらした。Slack のような便利なデジタルツールを利用すればデジタル空間で教員間の連携強化ができたが、教員間の信頼関係には同じリアルな空間で交流する「アナログな」ミーティングも、非常に重要な役割を果たすということを再確認する機会となったのである。元々 SFC フランス語セクションでは、教員がメーリングリストでつながると同時に、フランス語共同研究室が空間的な帰属の場として機能しており、他大学と比較するまでもなく、強力なチーム文化を持つキャンパスであった。ところが、教員の交代や、オンライン授業の実施などを経て、教員の帰属意識や連帯が次第に希薄となった。特に、20 年以上訪問講師(招聘)として SFC のフランス語教育に貢献したパトリス・ルロワは独特のユーモアとカリスマ性によってフランス語セクションの個性的な教員たちを強力にとりまとめる役割を果たしていたが、彼の退職が SFC のフランス語コミュニティにとって大きな損失となることは疑いようがなかった。

フランス語セクションでは、これまでの伝統である共同研究室での教員同士の交流を重要視し、授業の前後にくつろいで意見交換できるような環境作りにも気を配っている。さらに授業外では対面による教員会議を新学期前と学期末に実施し、普段は会う機会のないチームティーチングの同僚と対面し、話し合う機会を確保している。新学期の会議では役割分担などを確認し、学期末にはチームの全員が話し合いを通して成績を決定する会議となる。会議後の懇親会では食事を交えて親睦を図り、より良いチーム作りに役立っている。新任の教員は、こうした場で SFC での教歴が長い経験豊富な教員と交流することで、チームの一員として共有すべき SFC の「伝統」を間接的に学び、確認し、共有することができる。その意味においては、インフォーマルなアナログな現実空間である「フラ研」と Slack で作られるデジタルな協働の空間は、新任教員にとっては正統的周辺参加(レイヴ・ウェンガー, 1993)の場ともなる。

## 2.2 「フラ研」とSAによるフランス語コミュニティの形成

1.2において述べたように、SFCには各言語セクションに共同研究室が設置され、そこに専任教員、非常勤講師、TAやSA、フランス語受講生をはじめとする学生が集う環境があり、様々な交流や活動の場となってきた。

「フラ研」において、SAは最も重要なアクターの一人である。大学院生をTAとして教育活動に登用するシステムは一般的であるが、学部生をアシスタントとして学期ごとに任用するSFCのような例は稀である。フランス語共同研究室では、自薦他薦により毎学期10数名の学生たちがSAとしてフランス語コミュニティの活動を支え、「フラ研」の維持に貢献してきた。「フラ研」におけるSAたちの活動は、新学期に新入生を対象に行われる言語ガイダンスでのプレゼンテーション、学園祭での出店やクリスマスパーティーなどのイベント、研究室のHPの更新、SNSでの情報発信、フランス語受講生の学習補助、教員の補助など多岐にわたる。そのノウハウは先輩から後輩へと自主的に伝授され、チーフと呼ばれるリーダーと補佐役の副リーダーを中心に、非常に自律的な形でコミュニティが組織されている。他大学にもフランス語学習を目的とするサークル活動等はあるが、SFCのように学生がアシスタントとして謝金を得ながら言語コミュニティの一員としての役割を果たすという例はおそらく珍しいだろう。

しかしコロナ禍で授業がオンラインとなった2020年以降から、SAのコミュニティが徐々にその自律性を失っていった。キャンパス閉鎖中は、当然のことながらSAの業務はオンラインで対応可能なものだけになり、メンバー間の対面交流が失われたため、従来のようなグループチャットが希薄になった。SA業務のノウハウが先輩から後輩に自然に伝えられる機会と場がなくなり、業務が教員から随時依頼されるタスクの遂行に変わったことで、SAたちの自律性も減少したと考えられる。このような傾向は授業がキャンパスでの対面形式に戻り、SAたちが「フラ研」に戻ってからも、コロナ禍以前のような形に戻るまでには数年の時間を要した。SAによる「フラ研」活動を活性化させるために教員もさまざまな策を講じたが、良かれと思って行った教員による介入の多くは失敗し、SAのコミュニティが再活性化するには至らなかった。最もよく見られたケースは、メンバーたちの無断欠勤や遅刻、業務依頼等への無反応や無連絡などであり、責任感の強いリーダーたちに業務が集中する結果につながった。

こうした問題は、2023年秋学期後半から徐々に改善の兆しを見せていたが、2024年度春学期に新しいSAメンバーたちにより解決され、さまざまな新しい企画が素晴らしい成果をあげた。このポジティブな変化の要因を探るた

めに彼らの活動を観察し、気がついたことのひとつが、チーム形成における関係性構築プロセスの重要性である。つまり、大学生にとって「何を」するかということと「誰と」働くかということが同じくらい重要な割合を持つ可能性に思い至った。教員側には、同年代の若者同士なら初対面の者たちがランダムに一つのグループに入れられても、すぐに打ち解けて屈託なく共同作業をするのではないかという幻想や期待があるが、大学生にとっての現実はそうではない。まずはチームを作る前にアイスブレイクを行い、その過程でお互いを知り合って安心することが大切であり、最初に「楽しい」時間を共有して良好な関係を構築してからでないと、業務でのチームワークに支障をきたす可能性が高いのかもしれない。その意味で、2024年度春学期にSAたちが行った新学期前の合宿や、学期中の食事会などが功を奏したと言えるだろう。また2.1において、教員がSlack上のバーチャルコミュニティで連携を保ち、共同研究室を中心とするフォーマル／インフォーマルな交流に加わることが正統的周辺参加の意味を持ち、グループチャットを存続させるという点について触れたが、SAのレベルにおいても同様に、新しいメンバーが「フラ研」での正統的周辺参加を経て、コアメンバーとなっていく様子が見られた。これらの点に関しては今後も観察を続け、インタビュー調査等を実施することで、SAとのより良いコミュニティ作りに活かしていきたい。

## 2.3 World Ciné Clubの実践：フランス語から複言語・複文化の尊重へ

2023年秋学期より、フランス語セクションではWorld Ciné Club (以下WCCと省略)という企画に着手した。これは、SFCキャンパスの学生や教員を対象に、フランス語作品にこだわらず、海外の優れた映画作品を広く紹介し、視聴後のディスカッションを通して作品の理解を深めると共に、世界に存在するさまざまな言語や文化の豊かさを実感する機会を提供する教育実践として構想された。会場には大画面のスクリーンを有効利用できるθ館を活用した。θ館は正面のステージ上の壁面が複数の液晶画面で構成されている劇場型の施設であり、美しい映像を大画面で見る経験を担保する。上映作品の選定は、映画祭で受賞歴を持つなどの一定の評価がされていること、大画面での鑑賞にふさわしい審美的な価値や高い芸術性を持つこと、視聴後のディスカッションが展開できるような社会的メッセージを持つことの3点に加え、作品の言語が多言語であればさらに好ましいという基準によって行なった。

フランス語セクションの企画であるのに、英語を用いたWorld Ciné Clubという造語的名称を採用したことは、フ

ランス語作品だけではなく世界のすぐれた映画を紹介するというコンセプトに由来する。そして現代社会ではたとえばフランスの監督によりフランスを舞台に作品が作られていたとしても、映画の言語が全てフランス語になるとは限らないという現実もある。また、ciné はフランス語のcinéma (映画) の略語であるが、アクセント記号をつけない cine はスペイン語、イタリア語、ポルトガル語などで「映画」を意味する単語でもある。そして club は英語起源の単語だがフランス語でごく一般的に使われるので、言うなればその半分以上がフランス語であり、同時にフランス語の要素が若干入った英語とも言える。そして「シネクラブ」はもちろん和製英語である。

2023年11月末に開催した第1回WCCでは、エリア・スレイマン監督作品『天国に違いない』(*It must be heaven*, 2019) を上映した。作品選定のきっかけはイスラエル軍によるガザへの侵攻であった。パレスチナ出身のスレイマン監督は、この作品においてパレスチナ問題を政治的なドキュメンタリー作品として提示するのではなく、美しい映像と詩的なイメージ、静かなユーモアといった独特の技法を用いて逆説的に人間の生活の意味について描き、忘れることのできない映像世界を造形している。舞台は監督の半生を辿るようにパレスチナ、パリ、ニューヨーク、そしてパレスチナへと移動し、映画の言語もアラビア語、フランス語、英語、日本語とさまざまである。普段娯楽作品を中心に視聴していると出会う機会の少ないこのような芸術的作品を日本の大学生に紹介すると同時に、このような監督の存在を発見することが、パレスチナ情勢にも注目するきっかけにつながれば、という思いも込められていた。残念ながらこの第1回上映には学生がほとんど集まらなかったが、フランス語セクションのSAに上映会のポスターやWCCのロゴ作成を依頼し、学内での告知を経て上映会を実現するというプロセスを通して、フランス語セクションがイベント運営のノウハウを得たことに収穫があった。

第2回上映は諸理由によりしばらく延期された後、2024年5月より再開した。より明確なコンセプトに基づいてルールを決め、長期的な計画が立てられた。コンセプトとルールは以下の通りである。

- フランス語セクションと他の言語セクションとの共催形式とする
- 月1回のペースで実施する
- 上映作品は共催する言語セクションが選択基準に基づいて選定する
- 施設予約、DVD手配、ポスター作成等はフランス語セクションが負担する
- WCC当日は両セクションの教員が映画上映会およびディスカッションに参加する

下の表に、第2回～第4回上映における、3つの言語セクションとの共催の概要をまとめた。実際の運用においては、第2回を予定していた4月の開催が難しく、5月は上旬と下旬に分けて、2回の実施をした。

WCCでは、回を重ねる度に準備や上映のノウハウが蓄積された。上映後のディスカッションについても同様で、第4回共催のアラビア語セクションからはSFCの教員だけでなく、日吉キャンパスに所属するアルジェリア史を専門とする教員も加わり、視聴後の専門的な解説や活発な質疑応答で会場が大いに盛り上がった。現代においては、Netflixなどの配信サービスの普及により、スマートフォン等で映像作品を個人単位で視聴するライフスタイルが定着したが、WCCが学生に提案するのは映画鑑賞に関するもう一つの体験である。つまり映画を大画面で他人と鑑賞すること、そして視聴後のディスカッションを通して理解を深め、場合によっては感動も共有するという体験である。参加する学生数は多くはなかったが、WCCの企画に興味を示し、繰り返し参加する学生の存在も確認された。

このような企画をフランス語セクションのイニシアチブにより実施する意図は、前述したコンセプトの他に、SFC

表 World Ciné Club 実施概要

|     | 日時            | 作品                                                                                                      | 共催           | 言語              |
|-----|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|-----------------|
| 第2回 | 2024年<br>5月上旬 | 『悲しみのミルク』( <i>La teta asustada</i> , 2008年)<br>クラウディア・リョサ監督(ペルー)<br>ベルリン国際映画祭金熊賞受賞                      | スペイン語<br>研究室 | スペイン語、<br>ケチュア語 |
| 第3回 | 2024年<br>5月下旬 | 『アイム・ユア・マン』( <i>Ich bin dein Mensch</i> , 2021年)<br>マリア・シュラーダー監督(ドイツ)<br>ベルリン国際映画祭最優秀主演俳優賞受賞(マレン・エッゲルト) | ドイツ語<br>研究室  | ドイツ語、<br>英語     |
| 第4回 | 2024年<br>6月   | 『パピチャ 未来へのランウェイ』( <i>Papicha</i> , 2019年)<br>ムニア・メドゥール監督(アルジェリア)<br>カンヌ国際映画祭ある視点部門出品作品                  | アラビア語<br>研究室 | アラビア語、<br>フランス語 |

の言語教育の場合全体においてフランス語セクションからどのような貢献が可能かという問いに関連するものである。フランス語セクションの専任教員数は、慶應義塾の他学部専任教員数に比較すると非常に少ない一方、SFCの各語種の専任教員数との比較においては多い。ただ一人の専任教員によって運営される言語研究室も多いが、そのようなセクションでは文化的な授業外活動の実施は容易ではないだろう。しかし、企画を共催形式にして関連業務を分担すれば実施が可能となるだろう。独立する言語研究室が時には協同して言語セクション全体を共にボトムアップする共助の形を、SFCの言語教育の伝統を継承し、教員数が比較的多いフランス語セクションから示すことができるのではないかという思いつきがこのような形になった。

外国語教育が帝国主義的な思想と無縁ではないことはよく知られている。SFCの言語教育の理念である多言語主義について語る時、堀(2005)はSFCの言語教育が英語教育のみならず、英語以外の外国語の教育に力を入れてきた経緯を語る中で、日本の外国語教育にある英語への偏りを「一言語主義」として鋭く批判し、「一言語主義」に内在する言語帝国主義に警鐘を鳴らしている。ここで言われる「一言語主義」と対比される多言語主義という理念により、SFCの言語コミュニケーション科目は現在11言語を数え、学生は複数の言語の習得を奨励されている。

日本の大学においては、「第二外国語を選択する」という行為のために、学生の外国語科目選択に際しガイダンスが実施される。それぞれの語種がいかに魅力的かを学生にアピールするためにいきおいさまざまなパフォーマンスが展開され、「今年は何の言語がより履修者を増やすか」という志の低い「自由競争」に終始する面も見られる。SFCにおいても新学期に言語ガイダンスを実施しているが、多言語主義を標榜するSFCであれば言語間の「自由競争」ではないやり方で、言語と学生を有機的につなげていく活動に関わって行きたい。こうした意味で、多言語の環境を尊重し、我々一人一人の中にある複言語、複文化的価値を肯定的にとらえるために、フランス語セクションはキャンパスにどのような貢献ができるだろうか。

まずはWCCの今後の活動として、以下が予定されている。第5回WCCとして、2024年10月にリー・アイザック・チョン監督作品『ミナリ』(Minari, 2020年)の上映をフランス語、英語、朝鮮語の3つのセクションでの三者共催、第6回は12月初旬にマレー・インドネシア語セクションとの共催でモーリー・スリヤ監督作品『マルリナの明日』(Marlina si Pembunuh dalam Empat Babak, 2017年)、第7回は2025年1月上旬に日本語セクションとの共催で川和田恵真監督作品『マイスマールランド』(2022年)の上映

を予定している。また、学内での映画上映に関して、SFCメディアセンターを経由して上映権が許可された作品からの選定、上映権のあるDVDの購入など多くの面でSFCメディアセンターから温かい支援をいただいた。

### 3. おわりに

本論では、慶應義塾大学SFCキャンパスにおけるフランス語教育の「伝統」とその継承を整頓し、さらに社会の変化や学生の多様なニーズに対応した新たな取り組みについて紹介した。SFCのフランス語教育は開設当初から「インテンシブ」を中心に、実践的な言語運用能力の育成を目指し、学生たちに高度なフランス語能力を習得させるヴィジョンを持続してきたが、その過程で、共通教科書の廃止や、チームティーチングの強化、そして学生アシスタントのコミュニティ再建に関して新しい試みが行われている。

多言語主義に代表されるSFCの言語教育の理念は、欧州評議会が2001年に『ヨーロッパ言語共通参照枠』の刊行以降に提唱している複言語主義に基づく言語教育にもつながるものである。フランス語セクションでは、SFCの他言語セクションとも連携し、多言語主義、あるいは複言語・複文化主義を推進する形での実践を模索している。特にWCCのようなプロジェクトは学生に多様な言語が開く、多様な社会の存在に目を向ける機会を与え、SFC全体の言語教育および国際的な学びの場としてのコミュニティにも貢献し得るものであり、今後も引き続き実施を検討して行きたい。

### 参考文献

- 古石篤子(2005)「SFC外国語教育の変遷」『外国語教育のリ・デザイン—慶應SFCの現場から』慶應義塾大学出版会. p.28-51.  
古石篤子、堀茂樹、國枝孝弘(2005)「フランス語—継続と刷新：次世代フランコフォヌ先導者の育成を目指して」『外国語教育のリ・デザイン—慶應SFCの現場から』慶應義塾大学出版会. p.118-31.  
堀茂樹(2005)「多言語主義について—英語以外の外国語をくもく教える理由」『外国語教育のリ・デザイン—慶應SFCの現場から』慶應義塾大学出版会. p.9-27.  
レイヴ, J., ウェンガー, E., 福島真人訳(1993)『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書.  
薬谷郁美(2023)「外国語学習デザインの構築と運用 SFCドイツ語学習環境における実空間とサイバー空間の連動」『言語文化とコミュニケーション』慶應義塾大学出版会. p.141-60.

[受付日 2024. 9. 18]